

牧草と園藝



〈ニューストピックス〉

土壌改良 牛スクスク

えりも 町営牧野 牧草が栄養満点に

☆こんな見出しの記事を、今年の3月22日付の北海道新聞紙上で拝見した。低コスト肉牛生産の叫ばれている今日、大いに参考になると思うので、その後の情報も加えて、ここに紹介させていただく。☆

“えりも岬”で有名なえりも町の町営牧野で行われた肉牛発育促進試験の結果である。

試験は、昭和58年10月から始められた。当時、この牧野では、38戸の農家が約900頭の肉牛（日本短角種）を飼っていたが、牧草をあまり食べないため、子牛の発育にはばらつきが多く、売却収益も低かった。そこで、牧草地の土壌を分析してみると、リン酸とカルシウムが不足しており、従って、牧草中にもその傾向がみられた。

北海道農試の成績で、放牧地にリン酸を多用（15～20kg/10a）すると、嗜好性・採食性が良好となって、増体日量が高まるとあった。

そこで、炭酸カルシウムとリン酸の肥料である「タンカリン」を10a当り120kg、三要素を含む一般の化成肥料「052」を30kg施用したところ、牛は草をもりもり食べるようになったという。

その結果、昭和59年10月の市場に、肥育用素牛として出荷した生後5～17か月齢549頭の平均増体日量は0.82kgで、前年より7%多かった。従って、単価も120円の増となり、平均1頭当り26,000円前後高値に取引された。とくに、6～9か月齢の発育・増体が伸び、明らかに草生改善効果が認められ、前年に比べ格段に良い成績が得られた。

このことから、土づくりの大切なことが数字をもって裏づけられたと言える。

しかし、なお、標準発育値に達しているのは5割程度なので、更に、2年後には、これを8割に高めたいと、現地の関係者は張切っている。

表1 肉牛発育促進試験結果（昭59）

区分	出荷頭数	増体日量	販売単価	価格	対前年		備考
					価格差	比率	
メス	246	kg/年	円/kg	千円/頭	千円/頭	比率	5～7か月齢のみ
メス	246	0.81	677	148	+18	114	
メス	270	0.82	742	186	+34	123	
オス	33	0.96	763				

（日高東部地区農業改良普及所）

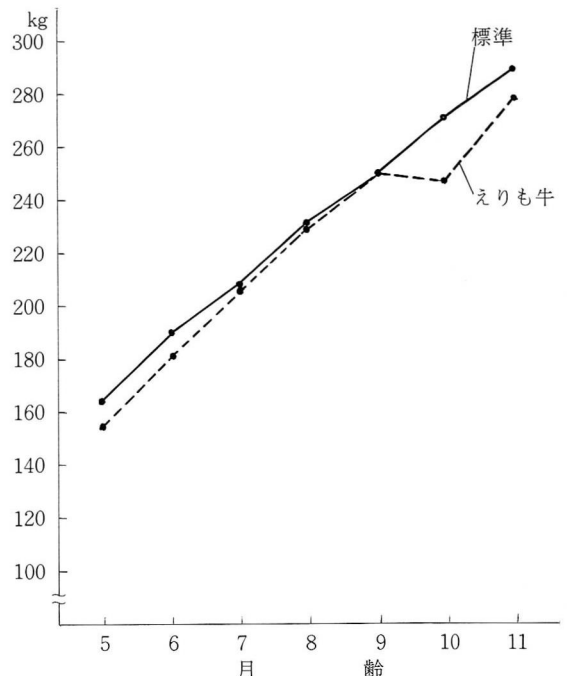


図1 体重の推移（メス子牛）